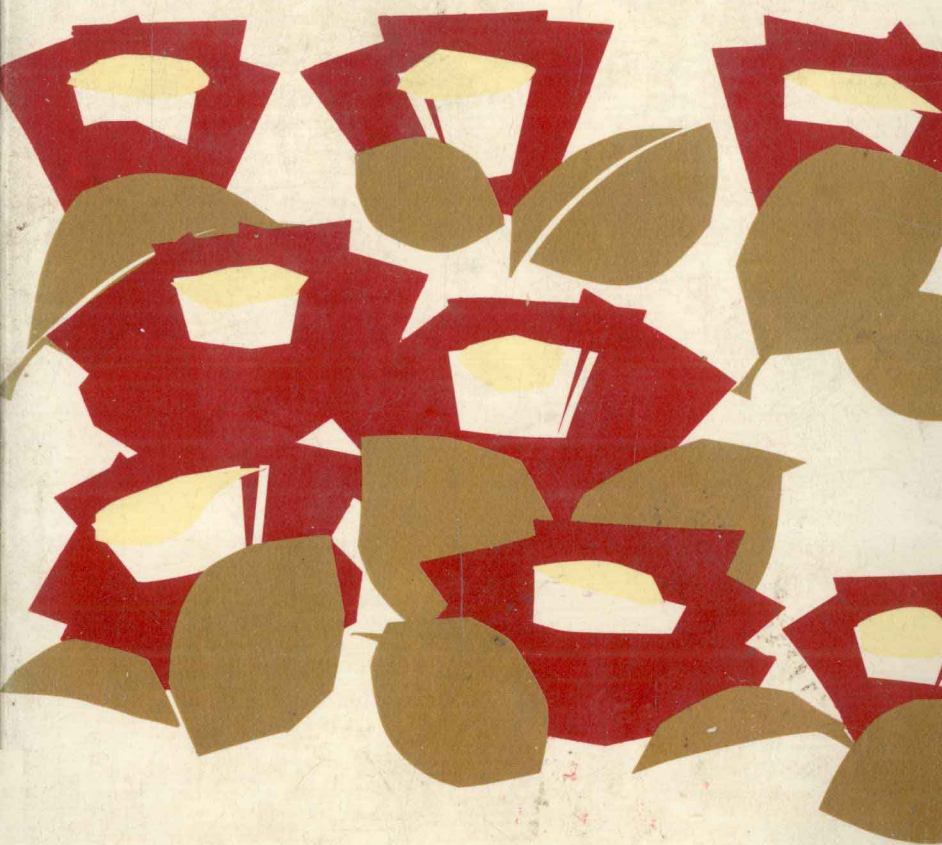


炎の舞い

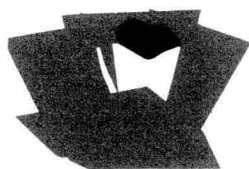
津村節子



新潮社版

炎の舞い

津村節子



新潮社版



© Setsuko Tsumura, 1975 Printed in Japan

炎ほのおの舞まい

昭和五十年八月十五日印刷
昭和五十年八月二十日発行

著者 津つ村むら節せつ子こ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七十一

電話・業務部(03)266 五一二一

・編集部(03)266 五四二一

振替 四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

定価 八五〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

炎の舞い

第一部

I

祖父は、よく眠っているようであった。

半年間の疲れが、一時に出たのであろうか。それにつき合わされた琴代も、疲労しているはずなのだが、その自覚は少しもない。むしろ、氣持の高ぶりのため、軀のすみずみまで鋼鉄のバネが仕組まれているように緊張し切っている。

一時止んでいた雪が、夕刻から降りはじめていた。雪が踏み固められていれば短靴でもよかったのだが、かなり積っているらしいのでゴムの長靴をはいて行かねばなるまい。琴代は皮靴を紙袋に入れた。スーツ・ケースはすでに前日

に用意して持ち出してある。手ぶらで家を出るつもりだったのだ。

そっと裏口の戸を開ける。たてつけの悪い戸がきしんだ音をたてたので、琴代は一瞬息を止めて様子を窺った。が、幸い祖父の深い眠りをさまたげるほどではなかったようだ。鍵はかけなくても、盗難の心配などない平穏な町である。祖父一人残してゆくことに危険は感じなかったが、さすがに惜別の思いが胸に迫り、琴代は十九年間祖父と共に過した小さな家を振り返った。

雪の多いこの地方では、どんなに小さな家でも柱だけは太く、堅牢に建ててあるが、雪おろしたばかりの屋根にまた雪が積りはじめている。このまま降り続けば、祖父はひとりで屋根に上って雪おろしをせねばならない。それを手伝ってやれぬことが心残りであった。

ゴム長靴の足跡が、雪の上にくっきりとついている。しかしこれも朝までには雪で埋もれてしまうだろう。

琴代はまだ中学生のころ、近くの村の人妻が、隣家の若い男の許にしのんでゆくのに、雪の上に足跡の残ることを恐れて、つなぎ合わせたしごきを窓から窓へ渡してつたわって行ったという話を聞いたことがある。そんなにまでして男の許へ通う女の情熱がそろそろしいような気がしたのだが、いま自分はただ一人の肉親を捨て、男の許に走ろ

うとしてゐるのである。

あでやかなしごきをつたわって自分のふところへ飛び込んで来る女を迎える男は、いとしさに胸を詰らせて冷たい足をあたためてくれたであらうか。それとも女の激しさにたじろぎ、圧倒されつづけていたのであらうか。

長靴を踏みしめる度に、雪のきしむ音がするほかは、何一つ聞えぬ静寂さだ。雪は、音という音をことごとく吸い込むように、絶え間なく降り続けている。

路地をぬけ、通りに出た。七五三のときに、祖父に連れられて詣でた、観神社の前を通る。鬱蒼と茂っている杉の古木も雪化粧し、広い境内も白一色に覆われている。晴れてもないのに、不思議な明るさが漂っていて、足許を照らす懐中電灯に頼らなくても歩けるのだ。心がせいて、琴代は何度も雪に足をとられ、転びそうになった。

目貫通りと言っても、役場の周辺だけはいくらか賑やかで、商店の並びは間もなくとぎれがちになる。竹林の傍を通るとき、バサリと雪の落ちる音がした。琴代はその音に一瞬立ちすくんだが、四囲は忽ち静寂にもどった。

約束の場所に車のかげが見えたとき、彼女は漸くこの計画が間違ひなく実行されつつあることを確かめて、安堵した。せっかく家を出ても、車が待っていないければ雪の夜道を行くすべはない。車は灯りを消しているから傍へ行くま

で中の人の姿は見えないが、この時間こんな場所に駐車しているのは、かれらのほかはない。

かけ寄ると、すぐドアが開いた。後部に荷を積めるようになってゐるライトバンである。無言で乗り込むと、彰二が琴代の手を握りしめてくれた。熱い手だった。

運転席の滋が、スイッチを入れてエンジンをかけた。車は這うように静かに動き出した。

「いややなァ、こんな役は。あんたらは東京へ行つてまうんやからいいけど、うらは、町に残るんやさけね」

「滋ちゃん、恩に着るでね」

琴代は滋の後から手を合わせた。

狭い町うちのことである。明日になれば彰二と琴代の駆け落ちは、すみずみまで知れ渡つてしまふだろう。滋は彰二の親友である。家業が寝具店なので、彰二に頼まれて夜中に車を走らせて二人を逃がす手助けをすることになったのだが、逃げてしまった二人に対する非難を、滋がかぶることになることは目に見えている。二人の無分別をとめる立場にある友達が、共犯者になつてしまったのである。

「おめの駆け落ちのときは、うらが助けてやるさけな」

彰二が、冗談めいた口調で、緊張した空気をほぐそうとした。

「駆け落ちなんか、もうごめんや。車をガレージから出す

ときは命が縮むような気がしたわ」

「ほんとにかんにんしてや。一生今夜のことは忘れんわ」
車は、ワイパーをせわしなく動かしながら、雪の中を走って行く。タイヤに巻いたチェーンのこすれあう音が琴代の胸に響く。

今から引き返せば、まだ間に合う——

そんな迷いが琴代をゆすぶり、彼女はその迷いを打ち消すように強く彰二の手を握った。

「東京へ行っても、手紙は書かんぞ。下宿を変えるさけ、しばらくは音信不通になるけど、便りが無いのは無事な証拠やと思うてくれ」

彰二は、きっぱりした口調で言った。琴代は、もうこうなったからは、彰二に自分をまかせるより仕方はない、と覚悟を決めた。

深夜の福井駅は、駅員のほかに人影もまばらで寒々としていた。

ただ一人の見送り人である滋は、入場券を買ってホームまで荷物を持って来てくれた。一人でも見送り人があることは、琴代にとってわずかな慰めであった。二人は座席に並んで坐ると、窓の外に立っている滋に手を振った。停車時間は三分である。忽ち滋の姿は後方に去り、列車はホームをはずれると、速度を次第に増しはじめた。

車輻の中の灯りは光度をおとしてあり、乗客たちは殆ど眠っていた。列車に乗り込むまでは追われているような切迫した気持ちだったが、これでもう連れ戻される心配はないと思うと、気がゆるむと同時に、淋しさと心細さが胸に溢れてきた。

「もう大丈夫や。疲れたやろ。米原までまだ三時間あまりもあるさけ、少し眠っておこう」

彰二の顔にも、安堵にまじって疲労の色が浮んでいる。

「彰二さん——」

琴代は、これからはじまる未知の生活に怯え、頼るべき唯一人の彰二の名を、確かめるように呼んだ。

「何とかなるやろ。心配せんでもいい」

何とかなる、とは心細い言葉である。彰二も、具体的に何の方策も立ててはいないらしい。まだ大学生の身では無理もないが、月々親から仕送りを受けていて、生活する手段は何もないのである。彰二も無謀だが、それを承知でついて来た自分も、無謀であることには変りない。それでも琴代は、自分なりによく考えた末のことであった。

二人の交際が始まったのは、去年の夏休みに彰二が帰省したときからである。そしてその夏の間に二人は深い交りを持つようになった。

休暇が終り、彰二と別れてからも琴代のかれに対する思いは深まるばかりだったが、彰二の気まぐれであったのならあきらめねばならない、と自制していた。しかし、彰二からも激しい感情的な手紙が矢継ぎ早やに届き、正月休みに帰省した折に、彰二の両親と、琴代の祖父との許しを得て結婚しようという約束も、往復する手紙で交わされたのだった。

女親がいたなら、琴代の様子に変化を感じたに違いない。幸か不幸か、琴代の身边には祖父しかいなかったし、かれは琴代と差し向かいで食事を済ませるとすぐ仕事場にはいつてしまう。一日に一度も口をきかぬことさえある無口な男であった。

しかもこのところ半年間というのは、昼夜もわかたぬ熱中ぶりで、琴代のことなど全く意中になく有様だった。わずかに四袋の登り窯だが、それでもこれに詰めるためには小ものなら七、八千個もの品物を用意せねばならない。その間は全く無収入になるので、琴代は生活のやりくりに疲れ果ててしまった。自家用の野菜を作り、鶏を飼い、自給自足の生活である。これまでにかれが焼いたものも、知己を頼って売りに行った。しかしそうした人々の好意に甘えてばかりもいられない。

祖父はこれまで、家の経済ということについて、考えた

ことがあるのだろうか。

祖父の一人娘である母きく乃は、十八歳で琴代を産み、父が出征したのは祖父と幼い琴代を抱えて農作業と家事とに軀を酷使して、三十二歳の若さで死亡した。父はそれより九年前、琴代の五歳の時に戦死したので、琴代にとって祖父が、ただ一人の肉親になってしまったのである。

戦時中は、祖父もさすがにやきものを焼くというような悠長な生活は許されず、食糧増産と、健康で若い男性がとごとく町から出征して行ったあと、警防団の一員として町を守る責任を課せられていた。が、敗戦後数年経って、いくらか混乱が収まってくると、祖父は、これまで出来なかった分を取り返そうとするかのように、やきもの一途に打ち込みはじめ、農作業も殆ど顧みなくなってしまった。それだけ、きく乃の負担が重くなるのは当然である。

きく乃は結核で死んだのだが、過労と栄養失調が原因だったのだろうと琴代は思う。つまりは、祖父のせいだ。祖父がもう少し農業に精出してくれば、母はあんなに早死にしなくてすんだのだ、と思うのである。

祖父は殆ど家でも口をきかず、笑顔を見せることも稀であったが、琴代のことは愛していた。越前織田の里では、古くからやきものが焼かれていて、琴代の小学校でも、工作の時間に粘土をこねさせ、楽焼をさせていたが、展覧会

のときに琴代の出品した埴輪めいた人形を見た祖父は、

「琴代は面白うなるかしらん」

と嬉しそうにきく乃に言った。

「はじめての作品やで、まぐれでしょうが。あんまり褒めんといて下さい」

きく乃は、まだ十歳にしかならぬ娘の将来を方向づけるような言葉を迂闊に口に出して、その方面に興味を持つようになつては——と祖父をたしなめた。しかし、祖父に言われなくても、琴代はそれ以来土をいじることに関心を持ちはじめ、時折祖父の仕事をしている傍へ行つて、土をいじるようになった。

土は、家の周囲にいくらでもある。祖父はそれを槌で叩いてこなし、鍬でかき起して篩ふるいにかけ、水を加えて踏み、積みかえては踏んで煉り合わせ、一週間位、ムロにねかせて単味たんみのはたき土を作る。

「学校のべと（土）よりやりにくい。学校のべとは、もっとすべすべしてやわつこいがの」

琴代が文句を言うと、

「学校は、水で漉したべと使っているのやろ」

祖父はそう言うだけで、琴代のために漉した土を作つてくれるわけでもなく、手に入れてくれるわけでもない。

琴代は、やがて見よう見真似で手ひねりの茶碗や小さな

壺などを作り、他の子供たちが鬼ごっこやままごと遊びをしているときも、土いじりに余念がなかった。人形を買つて貰うよりも、粘土を貰うほうが嬉しかった。

琴代が土をいじらなくなったのは、母が死んでからである。きく乃に代つて十四歳で主婦になつた琴代は、学校と家事とに追われて土をいじっている暇がなくなつたことも事実だが、女手ひとつに家のやりくりをまかせていた祖父の身勝手さが許せぬ氣持になつたのである。祖父を虜もろにしているやきものに反撥を感じるようになったのだ。

「おじいちゃん、うちにはもうお金のうなつた」

「ほうか。ほんならこれ持つて、吉川先生とこへ行つて来い」

祖父は、壺を一つ箱に入れ、風呂敷に包んで琴代に渡す。

「これ、持つて行つて、どうするんや」

「氣に入ったら、買うてくれる」

「氣に入らんかったら、どうするの」

「氣に入らんことないさけ、大丈夫や。お金もろたら、いるもん買うて来い。ついでに酒も買うて来てくれ」

「押し売りみたいやで、わて行きとやないわ」

「おっ母ちゃんが死んだんやさけ、おめもしつかりせなあかん」

「おじいちゃんこそ、しつかりしてや。小屋にばっかはい

ってて、ちっとも働かんやから」

「阿呆。うらは、人よりようけ働いてるわ。町中のもんが昼寝してる間も働いてるわ」

「おじいちゃんのやきもんは、道楽や。自分でも人によく言うとするやないけ。茶碗ではめしは食えんって」

祖父は、琴代の反駁に詰った。素直で従順だった娘のきく乃からは、聞いたことのない言葉である。

「おっ母ちゃんは、働きすぎて病氣になったんやでの。おじいちゃんは働いてるいうけど、お金にならん仕事は仕事やないわ。おじいちゃんが、ほんな道楽していられたのは、おっ母ちゃんが働きつづけてきたからやがの。わては、おっ母ちゃんみたいに、おじいちゃんの道楽を助けるのはいやや。働くのがいややというてるんやない。わても働くさけ、おじいちゃんも働いてほしいんや」

祖父に、頭から怒鳴りつけられるのを覚悟して言ったのだが、かれは何も言わなかった。祖父が黙っているの、で、琴代は言いすぎたような気がしてきて、可哀そうになった。それでも、自分は間違ったことを言っているのではないのだから、謝る必要はない、と自分に言い聞かせた。

祖父は、ろくろの前から立ち上ると、壺を包んだ風呂敷包みを持って家を出て行った。琴代は祖父を追おうとしたが、思いとどまった。

祖父庄右衛門の作品を売るのは、いつも母のきく乃の役目であった。店を構えていての商いならば、客は買う氣で来るのだからよいが、注文品でもないものを持って行くのは氣がひけはしなかったろうか。しかしきく乃は、嫌な顔ひとつ見せたことはなかった。言われるままに、壺や皿、茶碗などを風呂敷に包み、庄右衛門の作品を買ってくれてはいる人々の間を訪問して歩いていた。

最も古くからの後援者は、吉川という内科医で、祖父は自分で一番氣に入ったものを必ず届けた。吉川がこれまで買ってくれた数はいっただれくらいになるだろう。そんなに沢山のものを、どうする氣なのだろう、と琴代は人ごとながら心配になる。自分も幼いときから、病氣になる度に世話になって来た医師である。

「また吉川先生のとこへ持って行くんけ。先生も、迷惑に思っているならんやろか。いまに置く場所がうなあって、おじいちゃんのやきもん用の蔵でも建てなならんようになるわ」

「迷惑そうな顔になったことは、一ぺんもない。先生はおじいちゃんのファンやさけね」

「ほんとにほやろか。あんまり押しつけがましいことせんほうが、いいと思うけど」

「押しつけがましいやて。ほんない方あるかの。窯から

出したら、一番いいのを持って来いと、先生のほうから言
いになったんやでの」

きく乃は、氣を損ねたように言い、

「どんな名人、名工かて、はじめは無名やわの。無名のも
んが、いいもん作ったかて、見る目の無い人には、価値は
わからんのや。おじいちゃんのもんが売れんのは、無名や
からや。先生は、目があるさけ、買うて下さるんや。いま
にきつと価値が出る。わてはそう信じているさけ、おじい
ちゃん茶碗やら皿を持って行くと、卑屈な氣持になっ
たことはないわ」

琴代は、きく乃の言葉に圧倒されて、それ以上反撥する
ことが出来なかつた。きく乃が傍にいたからこそ、祖父は
家のことに何一つ心をわずらわされることなく、やきもの
三昧の暮らしが続けて来られたのだ。

きく乃の母美代は、福井市の機屋の娘であつた。庄右衛
門の家は織田^{オリ}では旧家で、家同士のつりあいもよいと、世
話する人があつて縁組をした。しかし美代は性格の不一致
を理由に離婚し、他家に嫁いだ。裕福な暮らしに馴れた彼
女にとって、窯を築くために山を手放したり、金にもなら
ぬものに打ち込んでゐる夫の生活態度は心もとない限りで
あつたらうし、それにも増して夫にかえりみられぬ孤独は
堪え難かつたのだらう。

庄右衛門は離婚には同意はしたが、きく乃は絶対に渡さ
ぬという条件だつた。別れたのちも、美代は人を介して何
度かきく乃を渡して欲しいと言つて来たが、母親はおらん
でもうらがちゃんと育てる、と庄右衛門は応じなかつた。

琴代は無論美代の顔を知らない。しかし、母よりも、祖
母の氣持のほうを理解出来るような氣がする。男が一つの
ものに打ち込むことは立派なことかもしれないが、それ
によつて周囲の者を犠牲にするのは勝手が過ぎると思う。

妻に去られても、庄右衛門には娘がいた。娘が死亡した
のちは、孫娘がいとあてにされてはたまらない。

琴代は、世間並の結婚をしたい、と夢見ていた。贅沢は
望まない。安定した暮らしが出来ればよかつた。そして夫
は、仕事に情熱を持たぬような男でも困るが、家をなおざ
りにするようでも困る。家にあつては、妻にやさしく、子
供を可愛がる平凡な家庭人であつてほしい、と思つていた。
十七、八歳ですでに結婚の相手のことをあれこれと考え
たりするのは早すぎるが、幼いときから家庭というものに
飢えていたせいかもしれない。

彰二と初めて言葉を交わしたのは、去年の夏休みであつ
たが、狭い町のことで、以前から顔は見知つていた。かれ
は同じ小学校の二級上で、造り酒屋の息子である。東京の

私立大学の商学部に進んだかれは、正月と、春休みと、夏休みの度に帰省していた。

たまたま琴代が祖父のやきものを福井市の旅館へ届けに行くとき、バスの停留所に彰二が立っていた。彰二は東京の大学へ行ってからどことなく洗練されてきたように思え、琴代はまぶしかった。東京の美しい娘たちを見馴れたかれの眼には、自分が田舎くさい野暮ったい娘に映っているだろうと思ひ、なるべくかれと視線が合わぬように後の方に身を避けていた。

バスを待っている人々は、かれらをのぞいては、中年の女性が二人だった。彰二はその女性たちに先を譲り、琴代を振り返った。

「えらい荷物ですね」

かれは、訛りの少い言葉で言い、不意に話しかけられてどぎまぎしている琴代の風呂敷包みを一緒に持ってくれた。

「あの、わて」

琴代は慌てて辞退しようとしたが、かれは屈託のない態度で琴代をうながしてバスに乗り込むと、並んで座席にかけた。

「どこまで行くんですか」

「福井の駅の傍までです」

「あんたは萩野庄右衛門さんこの」

「ええ、そうですけど」

琴代は、かれが自分のことを知っていてくれたことが意外でもあり、嬉しくもあった。頑固で偏屈な陶工として、庄右衛門の名は知っていても、琴代がその孫娘であるということを知っていてくれたとは思いがけなかった。

彰二は、福井市の高校時代の友達をたずねるところだと言った。

「それは、おじいさんのやきもんですか」

「ええ」

「うちにも庄右衛門さんの皿があります」

「買っていたたんでしょう。どうもすんません」

「いい皿やそうです。ぼくにはわからんけど——庄右衛門さんは、昔あいうもんを作っていなさったんですね」

「ああいうもんていうと」

「きれいな絵を描いたやきもんです。九谷焼のような——」

祖父が現在焼いているものからは、九谷風の絵付けをした皿など想像することは出来ない。それが祖父のものかどうか、琴代は不審を抱いたが、庄右衛門作だと持主の家の者が言っているのだから、そうなのだろう。それに、いい皿だと褒めてくれているのだし、彰二が自分に関心を持っ

てくれたのには、その皿がいくらか役に立っているようなので、琴代は何も言わなかった。

バスを降りると、彰二は品物の届け先である旅館まで、風呂敷包みの一方を持って一緒に来てくれた。

「だいぶ重いさけ、あんた一人では無理やろ」

「いいえ、馴れてますで」

「よう売れるの？」

「あんまり売れるものではないさけ、困るんです。この旦那さんが昔からうちのおじの友達やで、お客さんに出す皿小鉢を時々注文してくれるんですけど、おじは気まぐれやさけ、せっかく言うてももうても、気に染まん仕事はせんのです」

「商売気のない人やとは聞いていたけど、あんたが大変やね」

彰二はいつの間にか親しげな口調に変わっていた。

琴代は、はじめて言葉を交わした彰二に、つい愚痴めいたことを言ってしまった後悔したが、かれにやさしくいわられると、心が慰められるような気がした。だが、東京で暮らしていると、世間馴れて女とも平気で喋れるようになれるのだろう。それをかれの好意と思っではならない、と自分に言い聞かせた。

「品物届けたら、すぐ帰るんけ？」

「ここまで出て来たんやから、終バスまで買物もして行こうと思うてます」

琴代は丁寧な礼をのべて彰二と別れた。

品物を納めて代金をもらうと、デパートに回った。華やかなプリントのワンピースや、アクセサリー売場は、若い琴代の心をそそらずにはいない。しかし握りしめた財布の中味は、これからいつ現金がはいるかわからない生活に備えて、当面必要の品以外は、一円でも無駄使いしてはならないのである。

このごろ琴ちゃんはきれいになった、とみなに言われる。高校の制服を脱いだら、途端に娘々して来たと言われる。

若い時は二度とはないのに——と琴代は溜息をついた。

琴代は祖父のために開襟シャツを二枚と肌膚を買い、自分のものは、オレンジ色の花模様ブラウスを一枚買った。本当はワンピースが欲しかったのだが、少しでも儉約せねば、あとになって、やりくりが苦しくなる。おしゃれをしたい盛りの年頃であるのに、家計をあずかっている責任から、つましさが身についてしまった。正札を長い間見つめたあげくに、あきらめるときわびしさ——

それでも、一枚のプリントのブラウスは、琴代の心をいくらか浮き立たせていた。手さげ袋の中のデパートの包みを確かめながら、灯のともった街を歩く。祖父のやきもの

を届けてお金をもらうのは気がひけるが、賑やかな街の空気を吸うことは楽しい。福井の街を歩いている娘たちでさえ、センスがあって、着こなし上手に見えるのだから、東京の娘たちはどんなだろうか。

終バスまで少し時間があるので、駅近くの食堂で簡単な食事をした。こんなことも、田舎の単調な暮らしに馴れた琴代にとっては、ささやかな刺激になった。

織田の町からも、東京の女子大や、洋裁学校などに就学する娘が少しずつふえている。就職する娘たちは、大阪や名古屋方面が多い。織田は織物業が盛んで、若い労働力を必要としていたが、一度はみな都会に憧れを抱くのだ。

琴代は幼いときから利発で、学業成績もよかったから、自分より成績の劣るクラスメートたちが東京の大学に進むのを見ているのはつらかった。せめて住込みで夜間の大学へ通える職場に勤めたかった。祖父と二人暮らしで、就職することなど不可能と承知していても、やはり朝から晩まで家事と傭仕事に明け暮れる生活は、時々どうにもやりきれなくなる。二度と還らぬ青春の日々が貴重に思われてならず、今の生活からなんとか脱け出せぬものか、と焦躁に駆られることがあった。

終バスを待ちながら、

ああ、今日も一日終った――

と琴代はつぶやいた。明日からまた、変哲もない生活が繰り返されるのだ。せっかく買ったブラウスだが、いったい誰に見せようというのか――

琴代は、今日来るときに同じバスに乗り合わせた彰二のことを思い浮かべた。鮮やかなブリントのブラウスにいい手が伸びたのは、無意識に彰二のことが頭にあったのかもしれない。これまで琴代が身につけたこともない、華やかなブラウスなのだ。

かれは、確か別れるときに、これからの琴代の予定を聞いた。琴代は、品物を納めたあと終バスまで買物をすると言ったような気がする。もしもかれが琴代の言葉を覚えていて、そして琴代に少しでも関心があれば、帰りの時間を合わせるということも考えられなくはない。

しかし琴代は、そんな自惚れをすぐ否定した。

何と愚かしい期待を抱いたものか――

停留所には、終バスを待つ人々が数人いた。彰二は市内の友達を訪ねると言っていたが、久しぶりの帰省で昔の仲間とどこかへ飲みにも行っているのかもしれない。まだ帰るには早い時間だろう。どうせ休暇中である。今夜中に家に帰らねばならぬ用事などない暢気な身分なのだ。

琴代はバスの一番後の座席に掛けると、買物包みのはいつた手さげ袋を膝の上にかかえた。バスの扉が閉り、発車

がした。

自分の様子がいかにも貧しげに見えるのだろう。彰二の家は、この町でも五指にはいる裕福な旧家である。長男が病死したので、彰二は佐久間家の大事なよとり息子（相続息子）なのだ。

もっとも、萩野家もかつてはかなりの山林を持っていた。庄右衛門の代になってから、みな手放してしまったのである。もう少し前に生れて来たなら彰二に対して何のひけ目も感じずにつき合えたのに――、と琴代は今更のように祖父の気ままな生き方を恨めしく思った。

バスが織田に着くと、彰二は家まで送って行こう、と言ってくれた。しかし琴代は人目が気になるので、

「おおきに。ほやけど、すぐそこやし、馴れているさけ」と辞退した。狭い町うちでは、まだ若い男女が一緒に歩いたりすることは噂の種になりやすいのだ。

彰二と別れてから、琴代は今日一日を反芻するように思い浮べた。単調な日々を送っている琴代にとっては、思いがけない楽しい日であった。

家に帰ると、祖父が、

「疲れたやろ。湯が沸いているさけ、早うはいれ」と言った。祖父なりに気を使っているのだらう。

「ほんならちゃつとはいってくるわ。汗かいたでね。おじ

いちゃんにいいもん買うて来たさけ、これあけて見てや」

琴代は、開襟シャツの包みを祖父に渡すと、着換えを持って庭の隅にある浴室へ行った。板で囲って、トタンをのせただけの小屋の中に、古い風呂桶が据えてある。冬は隙間風がはいり、雨の日は雨もりがする浴室だが、今夜はトタンの破れ目から星空が見える。

明日、彰二が訪ねて来ると言うので、琴代は髪を洗った。真黒でやや太く、艶のある髪である。化粧をせぬ琴代の、ただ一つのおしゃれは髪の手入れで、よくすすいだあと、最後のすすぎのお湯に椿油をたらす。すると一層髪がしっとり艶を増すのだ。

風呂から上ると、

「あした、佐久間さんとの彰二さんが来なるかもしれん」

と、琴代はさりげなく言った。

「彰二さん？」

「東京の大学へ行ってなる人やがの」

「その人が、なんでうちへ来る」

「おじいちゃんのやきもんを、おみやげに東京へ持って行きなるとやて」

「東京の人に喜ばれるようなもんはないわ」

「またほんなことを言う。せっかく親切に言うてくれてな